

平成19年度 時間学研究所研究活動報告書

1. 研究所名 (英訳名)	時間学研究所 (Research Institute for Time Studies)			
2. 所長	氏名	辻 正二		
	電話番号	083-932-5976		
	E-mail	tsuji@yamaguchi-u.ac.jp		
3. 研究組織	(4部門 15プロジェクト)			
【部門】 プロジェクト名	研究組織	所属部局(専攻等)・職名)	プロジェクトの研究目的と意義	
【理論的時間研究部門】	<u>脇條靖弘</u>	人文学部・教授	時間についての認識論的、形而上学的問題の研究	
	太田 聡	人文学部・教授	言語の中の時間	
	乾 秀行	人文学部・助教授	言語と文学の時間に関する研究	
【自然的時間研究部門】	<u>中井 彰</u>	医学系研究科(医) ・教授	マウス個体発生プログラムの中の発生ステージ依存性遺伝子	
	山本晴彦	農学部・教授	前線・台風による集中豪雨の時間的・空間的特性の解析	
	藤島政博	理工学系研究科(理) ・教授	細胞内共生および細胞内寄生成立の分子機構と真核細胞進化の研究	
	杉野法広	医学系研究科(医) ・教授	卵巣と子宮内膜における血管の新生・成熟・退縮の性周期における変化	
	三浦保範	助教授(理工)	炭素の加速器による新しい年代の科学	
	【社会的時間研究部門】	<u>石田成則</u>	経済学部・教授	高齢社会における社会的時間の配分と調整の研究
		寺地信二	経済学部・助教授	経済心理・行動・制度進化
坪郷英彦		人文学部・教授	東アジア少数民族の時間観念の研究	
【応用的時間研究部門】	<u>中村彰治</u>	医学系研究科(医学系) ・助教授	生物時計と健康な生活	
	松富直利	農学部・教授	卵白アルブミンの熱安定型アルブミンへの転換とその生理的意義	
	長 篤志	理工学研究科(理工) 講師	使用者の知覚認知における時間精度を最適化するマン・マシンインターフェイスの開発	

部 門 用 (理論的時間研究部門)

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の見地から記入してください。

脇條靖弘人文学部教授グループ関係

1)

〈著書〉

入不二基義 『時間と絶対と相対と —運命論から何を読み取るべきか』(勁草書房) 2007年9月27日発行。
『哲学の誤読 —入試現代文で哲学する!』(筑摩書房・ちくま新書) 2007年12月5日発行。

〈研究論文〉

古荘真敬 「「原因」と「理由」の彼岸への問い—ハイデガーの哲学的企図の再吟味—」、電子ジャーナル Heidegger-Forum vol.1,

<http://www.shujitsu.ac.jp/shigaku/hf/ej.htm>, pp.6-21, 2007年4月

森野正弘 「時間に遅れる光源氏—『伊勢物語』への遡行と反復—」,日本文学協会『日本文学』No.647,pp.77-81,2007年5月10日発行。

古荘真敬 「共同体の没根拠と存在の変容—ハイデガーの共同体論の帰趨—」,哲学若手研究者フォーラム編『哲学の探求』第34号, pp.5-18, 2007年6月

入不二基義 「時間のメタ様相と二つの運命論」,青山学院大学文学部『紀要』第49号,pp.174-192, 2008年1月31日発行。

青山拓央 「無知の発見」,『知識構造科学の創造へ向けての基礎研究』,古田智久編,日本大学精神文化研究所, pp.141-149, 2008年3月21日。

脇條靖弘 未来判断とプロタゴラスの人間尺度説、平成20年(2008)年3月、『西洋古典学研究』,LVI, 26-37。

上野 修、「意味と出来事と永遠と—ドゥルーズ『意味の論理学』から」、『ドゥルーズ／ガタリの現在』,平凡社, 2008, pp.20-40。

〈学会・研究会・セミナー発表等〉

入不二基義 「時間と運命論」,第33回情報文化研究会講演会,國學院大學,2007年7月8日。

入不二基義 「時間の二様相と二つの運命論」,夏の山口ワークショップ(科研費研究会),2007年8月31日。

古荘真敬 「何が誰にとって「存在」しているのか?」夏の山口ワークショップ(科研費研究会)2007年9月

青山拓央 「タイムトラベルの論理」,山口大学イブニングセミナー2007, キャンパス・イノベーションセンター国際会議場, 2008年1月11日。

入不二基義 「瞬間と偶然 —時間を哲学する」(特定質問),三田哲学会主催シンポジウム,慶應義塾大学,2008年1月17日。

入不二基義 「対談・哲学の誤読」(永井均・入不二基義),朝日カルチャーセンター(新宿),2008年2月16日。

〈その他の執筆物〉

入不二基義 「懐疑と裏切り 書評:中島義道『観念的生活』(文藝春秋)」,『文學界』3月号,文藝春秋, pp.226-227, 2008年2月7日発行。

入不二基義 「ゲームの階梯」,『本』4月号,講談社,pp.10-12,2008年3月22日発行。

太田聡人文学部教授グループ関係

1)

〈研究論文〉

(1) 和田尚明 「「内」の視点と時制現象: 日英語対照研究」『文藝言語研究(言語篇)』筑波大学文藝・言語学系(編), 52, 93-149, 2007年10月31日。

(2) 松谷緑 「Jane Austen の小説における手紙: その言語の特徴と果たす役割」『英語と英米文学』, 山口大学, 42, 1-10, 2007年12月。

(3) 前田満 「言語変化の再現」『英語と英米文学』, 山口大学, 42, 11-45, 2007年12月。

(4) Edwards, Nathaniel Tyler "The Present Subjunctive in English: Expressions of the Timeless Present," 『英語と英米文学』, 山口大学, 42, 47-54, 2007年12月。

(5) 島越郎 「現在時制と過去時制の未来用法」『英語青年』, 153.1, 26-29, 2007年。

〈口頭発表〉

(6) Wada, Manabu "Re-classifying the Lexical Passives in Korean," 12th Harvard International Symposium on Korean Linguistics, held on Aug. 3-5, 2007 at Harvard University.

(7) 武本雅嗣 「ジェロンディフと現在分詞の制約について」日本フランス語学会第245回例会, 2007年12月16日(於: 東京大学)

(8) 和田尚明 「英語の未来時指示の現在進行形と Be Going To について」ワークショップ『英仏語の時制形式の解釈とモダリティ・アスペクトの影響』(2008年2月15日 於: 筑波大学人文社会学系棟)(平成19年度~22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))『日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究』主催)

(9) 和田尚明 「談話のタイプと時制現象: 会話テキストと物語テキストにおける時制現象の相違」ワークショップ『談話のタイプと文法現象(1): 談話のタイプの影響を受ける言語現象』(2008年3月8日 於: 筑波大学総合研

究棟A) (平成 19 年度～22 年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))『談話のタイプと文法に関する日英語対照言語学的研究』主催)

この他に、毎週金曜日に開催している「山口大学英語学研究会」において、19 年度は合計 11 本の時間に関する研究の口頭発表があった。

<外部資金獲得状況>

科学研究補助金 (基盤研究(C), 平成 20 年度～22 年度) に本グループのメンバーで新規応募し、採択された。

3)

<公開講座>

和田尚明「英語の時制現象を解き明かす」『平成 19 年度筑波大学公開講座「英語の教員のための英語の魅力再発見」』(2007 年 7 月 24 日 於: 筑波大学)

5. 自己評価

4. 活動報告・成果発表状況の 1)、2) 及び 3) の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 IV: 年度計画を上回って実施している, III: 年度計画を順調に実施している, II: 年度計画を十分に実施できていない, I: 年度計画を実施していない】(該当するいずれか一つに○を付けてください。)】その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。

4 グループの総合評価

1) 年度計画を順調に実施している

各研究分担者は、研究論文や口頭発表の形で研究成果を着実に発表できている。

2) 年度計画を順調に実施している

新しい学際領域の創出にはまだ至っていないが、時間に関する形而上学的・認識論的探求から、新たな視点の提供が試みられている。

3) 年度計画を順調に実施している

一般向けの書物や発表もあり、社会への成果の還元もなされている。

3 グループの総合評価

1) 年度計画を順調に実施している

各研究分担者は、研究論文や口頭発表の形で研究成果を着実に発表できている。

2) 年度計画を順調に実施している

新しい学際領域の創出にはまだ至っていないが、様々な言語の時間に関する現象を種々の理論的枠組みの観点から分析することはできている。

3) 年度計画を順調に実施している

19 年度は英語教員向けの公開講座が 1 件のみであったが、今後はこうした講座がもっと増える見込みである。

6. 20 年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要

平成 20 年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要 (5. 自己評価を踏まえて記載してください。)

20 年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。

研究計画・方法 (平成 20 年度)

「時間学基礎論セミナー」を継続する

・これまでの研究成果に基づき、講演会や出前講義等による社会還元を目指す。

毎週の研究発表 (山口大学英語学研究会) は従来通り継続する。

・山口大学時間学研究所の他のプロジェクトや分野と連携し、情報交換も密にしながら、学際的領域の新規開拓に努める。

・これまでの研究成果に基づき、講演会や出前講義等による社会還元や教育面での貢献も行う。

・科研費獲得のためのテーマの設定と計画の立案を行う。

研究計画・方法（平成 20 年度以降）

「時間学基礎論セミナー」を継続する

- ・これまでの研究成果に基づき、講演会や出前講義等による社会還元を目指す。
20 年度以降も毎週の研究会を継続する。（研究分担者の島越郎氏と前田満氏の 2 名が他大学に転出したため、研究会の参加者は少なくなったが、その分、残ったメンバーの発表回数や発表時間を増やしていく。）
- ・山口大学時間学研究所の他の研究グループと連携し、情報交換も密にしながら、学際的領域の新規開拓に努める。
- ・これまでの研究成果に基づき、公開講演、公開講座、出前講義等による社会還元を行う。
- ・科研費による共同研究を推進する。

部 門 用（自然的時間研究部門）

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の観点から記入してください。

中井 彰 教授（医学系）グループ関係

1) 原著論文

- T. Uchiyama, H. Atsuta, T. Utsugi, M. Oguro, A. Hasegawa, T. Nakamura, A. Nakai, M. Nakata, I. Maruyama, H. Tomura, F. Okajima, S. Tomono, S. Kawazu, R. Nagai, M. Kurabayashi. HSF1 and constitutively active HSF1 improve vascular endothelial function (heat shock proteins improve vascular endothelial function). *Atherosclerosis* 190: 321-329, 2007.
- M. Otaka, S. Yamamoto, K. Ogasawara, Y. Takaoka, S. Noguchi, T. Miyazaki, A. Nakai, M. Odashima, T. Matsushashi, S. Watanabe, and H. Itoh. The induction mechanism of the molecular chaperone HSP70 in the gastric mucosa by Geranylgeranylacetone (HSP-inducer). *Biochem. Biophys. Res. Commun.* 353: 399-404, 2007.
- K. Tanaka, S. Tsutsumi, Y. Arai, T. Hoshino, K. Suzuki, E. Takai, T. Itoh, K. Takeuchi, A. Nakai, and T. Mizushima. Genetic evidence for a protective role of heat shock factor 1 against irritant-induced gastric lesions. *Mol. Pharmacol.* 71: 985-993, 2007.
- H. Kitamei, N. Kitaichi, K. Yoshida, A. Nakai, M. Fujimoto, M. Kitamura, K. Iwabuchi, A. Miyazaki, K. Namba, S. Ohno, and K. Onoé. Association of heat shock protein 70 induction and the amelioration of experimental autoimmune uveoretinitis in mice. *Immunobiology* 212: 11-18, 2007.
- K. Tanaka, T. Namba, Y. Arai, M. Fujimoto, H. Adachi, G. Sobue, K. Takeuchi, A. Nakai, and T. Mizushima. Genetic evidence for a protective role for heat shock factor 1 and heat shock protein 70 against colitis. *J. Biol. Chem.* 282, 23240-23252, 2007.
- S. Inouye, M. Fujimoto, T. Nakamura, E. Takaki, N. Hayashida, T. Hai, and A. Nakai. HSF1 opens chromatin structure of IL-6 promoter to facilitate binding of an activator or a repressor. *J. Biol. Chem.* 282, 33210-33217, 2007.
- E. Takaki, M. Fujimoto, T. Nakahari, S. Yonemura, Y. Miyata, N. Hayashida, K. Yamamoto, R. B. Vallee, T. Mikuriya, K. Sugahara, H. Yamashita, S. Inouye, and A. Nakai. Heat shock transcription factor 1 is required for maintenance of ciliary beating in mice. *J. Biol. Chem.* 282, 37285-37292, 2007.

中井 彰、藤本充章、井上幸江 熱ショック転写因子 HSF と高次生命現象 実験医学 25 (10) : 1547-1553, 2007.

2) 国際学会発表

- A. Nakai HSF1 plays a role in feedback regulation of the febrile response. Gordon Research Conference on “Stress Proteins in Growth, Development & Disease” (2007.8.19-24, Oxford, UK). 招待講演
- A. Nakai Roles of HSF1 in inflammatory and immune response. Third International Congress on Stress Responses in Biology and Medicine (2007.9.23-26 Budapest, Hungary). 招待講演
- Mitsuaki Fujimoto, Eiichi Takaki, Naoki Hayashida, Sachiye Inouye, and Akira Nakai Characterization of the DNA-binding sites of HSF4 that constitutively forms a timer. Third International Congress on Stress Responses in Biology and Medicine (2007.9.23-26 Budapest, Hungary). ポスター
- A. Nakai Coordinate regulation of heat shock and inflammatory responses by HSF1. 6th International Workshop on the Molecular Biology of Stress Responses (Bangkok, Thailand, 2008.3.25-29) (招待講演)

3) 国内学会発表

- 井上幸江、藤本充章、高木栄一、林田直樹、中井 彰 熱ショック転写因子 HSF1 は IL-6 遺伝子のクロマチンを開くことによって転写制御に関与する 第 80 回日本生化学会大会・第 30 回日本分子生物学会年会合同大会 2007 年 12 月 11 日-15 日 (横浜) (口演)
- 藤本充章、大島功司、林田直樹、井上幸江、中井 彰 熱ショック転写因子 HSF4 が認識する DNA 結合配列の同定 第 80 回日本生化学会大会・第 30 回日本分子生物学会年会合同大会 2007 年 12 月 11 日-15 日 (横浜)
- 林田直樹、藤本充章、王倍倍、市川仁、井上幸江、中井 彰 熱ショック転写因子 HSF1 のターゲット遺伝子の網羅的解析 第 80 回日本生化学会大会・第 30 回日本分子生物学会年会合同大会 2007 年 12 月 11 日-15 日 (横浜)

4) その他の研究発表など

- 中井 彰 熱ショック転写因子群による恒常性の維持 GGA-HSP 勉強会 2007 (2007.9.8 東京) 特別講演
- 中井 彰 熱ショック転写因子群の生理機能 第 11 回 Molecular Cardiovascular Conference (2007.9.14-16 北海道余市) (招待講演)
- 林田直樹、藤本充章、高木栄一、大島功、王倍倍、井上幸江、中井 彰 熱ショック転写因子による細胞の生と死の決定の機構 大学共同利用機関法人・自然科学研究機構 (生理学研究所) 研究会「上皮膜機能活性化物質と上皮膜防御の最前線」(2007.11.1~2、岡崎) (招待講演)
- 藤本 充章、大島 功司、新川豊英、王 倍倍、林田 直樹、井上 幸江、中井 彰 レンズ発生過程における HSF 群による転写制御の機構 08' 遺伝情報 DECODE・冬のワークショップ (1 月 21-23 日、越後湯沢) (口演)

5) 特許申請

なし

6) 受賞

なし

7) 外部資金獲得状況

科学研究費補助金

特定領域研究(公募) 1件、基盤(B) 1件、基盤(C) 1件、若手(B) 1件

共同研究 1件

研究助成金 1件

8) その他の研究費獲得

なし

山本晴彦教授(農)グループ関係

1) 原著論文、著書

矢野大輔, 山本晴彦, 岩谷潔, 気温データベース構築のための気象資料の数値データ化における手法別時間効率の評価, 時間学研究, (1), 85-96, 2007.

山本晴彦, 岩谷潔, 東山真理子, 2005年台風14号(NABI)による豪雨と山口県錦川流域における洪水災害の特徴, 自然災害科学, 26(1), 55-68, 2007.

山本晴彦, 高山成, 岩谷潔, 兼石篤志, 土谷安司, 原田陽子, 東山真理子, 白水隆之, 都市におけるヒートアイランド現象の現状と屋上・壁面緑化による気候緩和効果, 気象利用研究, (20), 1-4, 2007.

白水隆之, 山本晴彦, 地方自治体における防災士養成講座の取り組み, 自然災害科学, 26(3), 240-245, 2007.

山本晴彦, 白水隆之, 山口県における防災士養成講座の設立準備について, 自然災害科学, 26(3), 250-253, 2007.

東山真理子, 岩谷 潔, 山本晴彦, 山口県美川町において2005年台風14号により発生した水害に関するアンケート調査, 時間学研究所, (2), 10-25, 2007.

東山真理子, 岩谷 潔, 山本晴彦, 台風災害の報道分析と過疎・高齢化地域における防災対策, 時間学研究所, (2), 26-35, 2007.

岩谷 潔, 山本晴彦, 土谷安司, 農業技術大系果樹編追録, プラントキャノピーアナライザーによる樹冠葉面積の計測, 20-23, 農文協, 東京, 2007年.

山本晴彦, 農作物における塩害「潮風害」の特徴. 日本海水学会誌, 61(2), 110-117, 2007.

2) 国際学会発表

Naru TAKAYAMA, Ryuji KIMURA, Satoshi SHINODA, Haruhiko YAMAMOTO, Geographic Classification of Loess Plateau from the viewpoints of Natural Environment Factors. -Climate, Erosion and Vegetation-, International Symposium on Agricultural Meteorology ISAM2008, 137-137, 2008年3月

TSUCHIYA Y., IWAYA K., YAMAMOTO H., TAKAYAMA N., Non-destructive measurement of the leaf area index of graps vines using the optical method, International Symposium on Agricultural Meteorology ISAM2008, 142-142, 2008年3月

TSUCHIYA Y., IWAYA K., YAMAMOTO H., TAKAYAMA N., Moniraring of Field Ecological Information by a Balloon Observation System, International Symposium on Agricultural Meteorology ISAM2008, 142-142, 2008年3月

3) 国内学会発表

矢野大輔, 山本晴彦, 高山 成, 岩谷 潔, 気象資料の数値データベース化に基づく大分県を事例とした降水特性の解析, 第26回日本自然災害学会学術講演会講演概要集, 101-102, 2007年9月

白水隆之, 東山真理子, 高山 成, 岩谷 潔, 山本晴彦, 水防災学習プログラムによる中学生の講座型学習活動の展開ー平成19年度サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトを事例としてー, 中国・四国の農業気象, 20, 38-41, 2007年12月

森 博隆, 岩谷 潔, 高山 成, 山本晴彦, 原田陽子, 兼石篤志, 土谷安司, 世界遺産「熊野参詣道」における苔類植生モニタリングと植生衰退の評価, 中国・四国の農業気象, 20, 34-37, 2007年12月

山本晴彦, 大下慎介, 原田陽子, 東山真理子, 茂原未央, 平成19年度産早期水稲における品質劣化・減収要因の解析, 中国・四国の農業気象, 20, 42-45, 2007年12月

土谷安司, 岩谷 潔, 山本晴彦, 高山 成, 光学的手法を利用したブドウ樹の総葉面積の非破壊測定, 中国・四国の農業気象, 20, 50-53, 2007年12月

Wang F., Yamamoto H., Research on ginkgo leaf necrosis induced by Typhoon 0613, Agricultural Meteorology of Chugoku and Shikoku, 20, 56-59, 2007年12月

高山 成・山本晴彦・岩谷潔・原田陽子・東山真理子・土谷安司・兼石篤志・白水隆之, 作用温度指標を用いたヒートアイランド強度の評価ー植栽テラスガーデンを含めた福岡市中心街における2007年夏の観測結果ー, 中国・四国の農業気象, 20, 60-63, 2007年12月

東山真理子, 矢野大輔, 岩谷 潔, 高山 成, 山本晴彦, 気象資料の数値データベース化に基づく山口県を事例とした降水特性の解析, 平成19年度日本気象学会九州支部発表会 要旨集, 29, 7-8, 2008年3月

山本晴彦, 大下慎介, 原田陽子, 東山真理子, 茂原未央, 平成19年度産早期水稲における減収・品質劣化に及ぼす気象要因の解析, 平成19年度日本気象学会九州支部発表会 要旨集, 29, 5-6, 2008年3月

岩谷潔・執行正義・山内直樹・山本晴彦・荊木康臣, LED光源を搭載した小型人工気象器の開発, 日本農業気象学会2008年度全国大会講演要旨, 60-60, 2008年3月

山本晴彦, 岩谷潔, 張 継権, 満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析, 日本地理学会発表要旨集, 73, 60-60, 2008年3月

4) その他の研究発表など

古賀敦子, 高山 成, 岩谷 潔, 山本晴彦, 水稲における潮風害の特徴と人工衛星データを用いた被害評価, 第54回風に関するシンポジウム, 2008年2月

東山真理子, 岩谷 潔, 高山 成, 山本晴彦, 台風災害の報道分析と過疎・高齢化地域における防災対策ー2005年台風

14号を事例として、第54回風に関するシンポジウム、2008年2月
山本晴彦、高山 成、岩谷 潔、白水隆之、土谷安司、兼石篤志、原田陽子、東山真理子、わが国で近年に発生した竜巻災害の特徴、第54回風に関するシンポジウム、2008年2月

5) 特許申請

なし

6) 受賞

なし

7) 外部資金獲得状況

科学研究費補助金、1件

寄附金、11件

共同研究・受託研究、3件

8) その他の研究費獲得

研究活動に関連した学内・学部内特別配分研究経費等（研究主体教員研究経費）、1件

藤島政博 教授（理工）グループ関係

1) 原著論文

- (1) Kodama Y., Nakahara M., Fujishima M. Symbiotic alga *Chlorella vulgaris* of the ciliate *Paramecium bursaria* shows temporary resistance to host lysosomal enzymes during the early infection process. *Protoplasma*, 230, 61-67, 2007.
- (2) Kodama Y., Fujishima M. Infectivity of *Chlorella* species for the ciliate *Paramecium bursaria* is not based on sugar residues of their cell wall components, but based on their ability to localize beneath the host cell membrane after escaping from the host digestive vacuole in the early infection process. *Protoplasma*, 231, 55-63, 2007.
- (3) Miyakawa, I. and Yawata, K. Purification of Abf2p-like protein from mitochondrial nucleoids of yeast *Pichia jadinii* and its role in the packaging of mitochondrial DNA. *Antonie van Leeuwenhoek* 91, 197-207, 2007.
- (4) Miura, K., Toh, H., Hirakawa, H., Sugii, M., Murata, M., Nakai, K., Tashiro, K., Kuhara, S., Azuma, Y., and Shirai, M. (2008) Genome wide analysis of *Chlamydomonas reinhardtii* gene expression at the late stage of infection. *DNA Research*; 15, 83-91.
- (5) Harley, R., Herring, A., Egan, K., Howard, P., Gruffydd-Jones, T., Azuma, Y., Shirai, M., Helps, C. (2007) Molecular characterisation of 12 *Chlamydomonas reinhardtii* polymorphic membrane protein genes. *Vet Microbiol.*;124:230-8
- (6) Murata, M., Azuma, Y., Miura, K., Rahman, MK., Matsutani M., Aoyama, M., Suzuki, H., Sugi, K. and Shirai, M., (2007) Chlamydial SET domain protein functions as a histone methyltransferase. *Microbiology*; 153: 585-92.
- (7) Oda, H., Suzuki, H., Sakai, K., Kitahara, S., Patrick, MS., Azuma, Y., Sugi, K., Kitamura, T., Kaye, J. and Shirai, M., (2007) Rac1 mediated Bcl-2 induction is critical in antigen-induced CD4 single positive differentiation of a CD4+CD8+ immature thymocyte line *J. Leuko. Biol.*; 81: 500-8.
- (8) Okuda H, Sakuhana C, Yamamoto R, Mizukami Y, Kawai R, Sumita Y, Koga M, Shirai M, Matsuda K. Intermediate domain defines broad nucleotide selectivity for protein folding in *Chlamydomonas reinhardtii* GroEL1. *J Biol Chem*, 283: 9300-7, 2008.

2) 国際学会発表

- (1) M. Fujishima, K. Iwatani, Y. Nakamura, Y. Kodama. Infection of *Holospira* is controlled by 89-kDa periplasmic protein and the host actin. *Protistology*, Vol. 5, No. 1, 31-32, 2007. Abstract, V European Congress of Protistology and XI European Conference on Ciliate Biology, July 23-27, 2007, St. Petersburg, Russia.
- (2) Y. Kodama, M. Fujishima. Timing of differentiation of perialgal vacuole membrane from digestive vacuole membrane of the ciliate *Paramecium bursaria* during infection with symbiotic algae *Chlorella vulgaris*. *Protistology*, Vol. 5, No. 1, 43-44, 2007. Abstract, V European Congress of Protistology and XI European Conference on Ciliate Biology, July 23-27, 2007, St. Petersburg, Russia.
- (3) Yoshinao Azuma, Mohd A. Rahman, Mutsunori Shirai. Host Apoptosis Regulation by Chlamydia Infection American Society for Microbiology the 107th General Meeting 2007.5.21-25 Metro Toronto Convention Centre
- (4) Yoshinao Azuma, Mohd A. Rahman, Mutsunori Shirai. Chlamydial infection modulates apoptosis regulation of host cells 47th Annual Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy (ICAAC) 2007.9.16-20 Chicago, Illinois

3) 国内学会発表

- (1) 藤島政博、児玉有紀. 核内共生細菌ホロスポラの標的核への感染は宿主アクチンの重合を必要とする. (社) 日本動物学会中四国支部会報、No.59, p24, 2007.
- (2) 児玉有紀、藤島政博. ミドリゾウリムシの感染過程における食胞膜からPV膜への分化のタイミングについて. (社) 日本動物学会中四国支部会報、No.59, p23, 2007.
- (3) 招待講演. 児玉有紀、藤島政博. ミドリゾウリムシと共生クロレラの細胞内共生成立機構. 第71回日本植物学会シンポジウム「藻類学・プロテオミクスが招く植物科学」、2007年9月7-9日、東京理科大学野田キャンパス.
- (4) 藤島政博、児玉有紀、岩谷綱一、中村欽光、道羅英夫. 核内共生細菌ホロスポラの標的核への感染はラトランキュリンBで阻害される. (社) 日本動物学会第78回大会要旨集、p53, 2007.
- (5) 児玉有紀、藤島政博. ミドリゾウリムシの共生クロレラの過程過程における食胞内の酸性フォスファターゼ活性. (社) 日本動物学会第78回大会要旨集、p53, 2007.
- (6) 田中健也、藤島政博. ゾウリムシ核分化過程における大核核小体特異的抗原の出現時期. 第40回日本原生動物学会講演要旨、p16, 2007.
- (7) 児玉有紀、藤島政博. シクロヘキシミドは共生クロレラを包むPV膜の膨張とクロレラの消化を誘導する. 第40回日本原生動物学会講演要旨、p19, 2007.
- (8) Fema Abamo, Hideo Dohra, Masahiro Fujishima. Fates of 63-kDa periplasmic protein of infectious form of endonuclear symbiotic bacterium *Holospira obtusa* during infection process. 第40回日本原生動物学会講演要旨、p16, 2007.
- (9) 児玉有紀、藤島政博. ミドリゾウリムシと共生クロレラの細胞内共生成立機構. 第7回日本原生動物学会若手の会ワークショップ講演要旨集、2007年.

- (10)近藤 航、北川孝雄、赤田倫治、宮川 勇. 酵母ミトコンドリア形態変異株に関するゲノムワイド解析. 日本植物学会第71回大会研究記録 p200, 2007.
- (11)宮川 勇、藤村良子、藤田由香、門脇 祐. 酵母ミトコンドリア核様体のヌクレアーゼ感受性.日本植物学会第71回大会研究記録 p145.
- (12)近藤 航、北川孝雄、赤田倫治、宮川 勇. 酵母ミトコンドリア形態変異株に関するゲノムワイド解析. 第25回 YEAST WORKSHOP 講演要旨集 p25.
- (13)松延美紀、荒田耕輔、宮川 勇. 酵母 *Yarrowia lipolytica* のミトコンドリア核様体タンパク質の解析. 第25回 YEAST WORKSHOP 講演要旨集 p65.
- (13) 招待講演 東 慶直 ゲノム解析による有用遺伝子探索 2007 年日本農芸化学会中四国・西日本支部合同大会 2007.9.14 山口大学大会館
- (14) 白井睦訓、村田正之、東 慶直 クラミジアのクロマチン制御メカニズムの解明 平成19年度 中四国乳酸菌研究会 2007.5.25 全日空ホテル
- (15) 片桐 友樹、波多野 直哉、泉 友則、前川 剛志、劉 穎、中村彰治、白井睦訓、水上 洋一 nano-LC-Q-TOF-MS/MS 法によるラット脳領域別プロテオミクス解析 第108回山口大学医学会学術講演会 2007.7.14 山口大学医学部霜仁会館
- (16) 北原誠司、鈴木春巳、酒井幸平、小田浩代、Michael S. Patrick、内藤克輔、白井睦訓 B細胞の分化および選択における Phosphoinositide 3-kinase の機能 第108回山口大学医学会学術講演会 2007.7.14 山口大学医学部霜仁会館
- (17) 白井睦訓、モハメド・A・ラーマン、村田正之、東 慶直 クラミジアゲノムから見た感染と制御 第5回 感染症病態研究会 2007.9.1-2 阿蘇プリンスホテル
- (18) 松谷 峰之介、東 慶直、吉岡里美、小川基彦、岸本義男、白井睦訓 日本紅斑熱の病原菌 *Rickettsia japonica* の全ゲノム解析 第60回日本細菌学会中国・四国支部総会 2007.10.13-14 岡山県立大学 共通講義棟
- (19) 三浦公志郎、東 慶直、白井睦訓 肺炎クラミジアの感染後期におけるゲノムワイドな発現解析 第60回日本細菌学会中国・四国支部総会 2007.10.13-14 岡山県立大学 共通講義棟
- (20) 村田正之、東 慶直、白井睦訓 クラミジア SET ドメインによるクロマチン制御 第25回日本クラミジア研究会 第14回リッケチア研究会 合同研究発表会 2007.10.27 国立感染症研究所
- (21) ODA Hiroyo, PATRICK Michal Scott, SATO Yoshimori, CHIDA Dai, SASAZUKI Takehiro, SHIRAI Mutsunori, SUZUKI Harumi T細胞分化および活性化における RhoH の機能 第37回日本免疫学会総会・学術集会 2007.11.20-21 グランドプリンスホテル新高輪
- (22) 東 慶直、白井睦訓 クラミジアによる宿主アポトーシスの制御 第30回日本分子生物学会年会第80回日本生化学会大会 合同大会 2007.12.11-15 パシフィコ 横浜
- (23) 松谷峰之介、東 慶直、吉岡里美、白井睦訓 日本紅斑熱病原菌リケッチア・ジャポニカのゲノム解析 第4回微生物研究推進体研究集会 2007.12.21 山口大会館
- (24) 東 慶直、古谷直子、松谷峰之介、松下一信、白井睦訓 酢酸菌 *Acetobacter pasteurianus* 2株の形質とゲノムの比較解析 第4回微生物研究推進体研究集会 2007.12.21 山口大会館
- (25) 福永 肇、水野秀一、白井睦訓 マイクロダイセクション法と肺炎原因菌検出マイクロアレイによる肺炎診断 第109回山口大学医学会学術講演会 2008.2.9 霜仁会館
- (26) 東 慶直、岡村美奈子、伊藤一成、白井睦訓 クラミジアの宿主アポトーシス制御因子の解析 第81回日本細菌学会 2008.3.24-26 国立京都国際会館
- (27) 水野秀一、福永肇、伊藤一成、吉岡里美、調恒明、東 慶直、白井睦訓 肺炎診断のための定量的PCR法とマイクロダイセクション法の検討 第81回日本細菌学会 2008.3.24-26 国立京都国際会館
- (27) 白井睦訓 近紫外光による殺菌装置の開発 第54回日本実験動物学会総会 2007.5.23-25 タワーホール船堀

4) その他の研究発表など

- (1) 白井睦訓 近紫外LED殺菌装置の開発 やまぐちイノベーションフォーラム2008 2008.3.11 山口グランドホテル
- (2) 東 慶直、松谷峰之介、松下一信、永田宏次、加賀孝之、高本秀司、近藤康一、中野 繁、薮崎正広、島崎大輔、渡辺誠司、藤田信之、細山 哲、白井睦訓 *Acetobacter* sp. NBRC 3283株のゲノム解析 酢酸菌2菌種のゲノム解析に関する共同研究の合同報告会 2008.3.26 ミツカングループ 名古屋支店

5) 特許申請

- (1)特願 2007-194777 ; リガーゼを用いた塩基置換方法 ; 発明者、藤島政博、水上洋一、殿岡裕樹 (出願平成19年7月26日)
- (2) 東 慶直、白井睦訓ほか2名「医療用発光装置」特願 2007-095916、平成19年3月31日
- (3) 発明者 白井睦訓、福永肇、藤原一彦。横山兼久、藤本健太郎、 権利者 山口大学、(株)住友ベークライト、 出願番号 特願2007-285108「核酸の定量方法」
- (4)発明者 白井睦訓、福永肇、藤原一彦。横山兼久、藤本健太郎、 権利者 山口大学、(株)住友ベークライト、 出願番号 特願2007-207966「肺炎原因菌検出用プライマーセット」
- (5) 発明者 白井睦訓、東慶直 権利者 山口大学 出願番号 特願 2007-095916 「殺菌光を用いた化膿予防器機」

6) 受賞

なし

7) 外部資金獲得状況

- (1)平成 17-20 年度、科学研究費補助金基盤研究(B)海外、「ゾウリムシとその核内共生細菌ホロスポラの世界分布図の作成」(研究代表:藤島政博、1,270万円)
- (2) 平成 18~19 年度 地域コンソーシアム「世界初の肺炎原因菌及びクラミジア・リケッチア鑑別システムの開発」(代表:白井睦訓, 研究分担:東 慶直、15,000万円)。
- (3) 平成 18~20 年度 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 新技術・新分野創出のための基礎研究推進事業

「耐熱性発酵微生物の「耐熱性」分子機構の解明と発酵産業への利用（研究代表者：松下一信（11,000万円）の研究分担：東 慶直、白井睦訓）

- (4) 文部科学省 知的クラスター創成事業、やまぐち・うべ・メディカル・イノベーション・クラスター、「高輝度 LED 技術を基盤とする医療用抗原システムの開発」②III) LED による殺菌装置の開発（代表：白井睦訓）
- (5) 経済産業省 独立行政法人 製品評価技術基盤機構 NITE、バイオテクノロジー分野ゲノム解析部門 事業、課題名「*Acetobacter* sp. NBRC 3283 株のゲノム解析に係る共同研究」（代表：白井睦訓）
- (6) 独立行政法人 製品評価技術基盤機構 NITE、バイオテクノロジー分野ゲノム解析部門事業、「酢酸菌 *Gluconacetobacter xylinus* NBRC3288 株のゲノム DNA 配列解析」（代表：白井睦訓）
- (7) 財団法人ちゅうごく産業創造センター 産学官連携新産業創出研究会、研究課題名 迅速肺炎診断を目的としたカセット式簡易診断機器の開発（代表：白井睦訓）

共同研究

- ・(株) ミツカン酢
「研究題目「酢酸菌 *Acetobacter aceti* の全ゲノム DNA 配列解析」（研究代表：白井睦訓）
- ・(株) ミツカン酢 受託研究費
「研究題目「酢酸菌 *Gluconacetobacter xylinus* NBRC3288 株のゲノム解析」（研究代表：白井睦訓）

8) その他の研究費獲得

- (1) 理学部ハイライト研究、「原生物の種の保存と教育研究機関への分与機能の維持および「岩国市立ミクロ生物館」と連携した環境保全教育活動の実施」（研究代表：藤島政博、30万円）
- (2) 寄付金 4件

川道穂津美 助教（医学系）グループ関係

1) 原著論文

Xu D, Kishi H, Kawamichi H, Kajiya K, Takada Y, Kobayashi S: Involvement of Fyn tyrosine kinase in actin stress fiber formation in fibroblasts. *FEBS Lett.* 581, 5227-5233, 2007.

スフィンゴ脂質による血管収縮のカルシウム感受性制御の血管病における意義、加治屋勝子、岸博子、川道穂津美、小林誠、*血管医学*、Vol. 9、No. 3、2008

2) 国際学会発表

なし

3) 国内学会発表

岸博子、森景則保、加治屋勝子、川道穂津美、高田雄一、徐丹、郭鳳玲、王晨、松尾さやか、小林誠：SPC/Fyn/Rho-kinase 経路による血管平滑筋収縮の Ca^{2+} -sensitization への膜ラフトの関与とこれに対するエイコサペンタエン酸の抑制メカニズム、第 49 回日本平滑筋学会（平成 19 年 7 月 4-6 日、榎原ロイヤルホテル、奈良）Excellent Research Award を受賞

加治屋勝子、岸博子、川道穂津美、小林誠、血管平滑筋の異常収縮を特異的に阻害するエイコサペンタエン酸の作用メカニズム、第 16 回日本脂質栄養学会（平成 19 年 8 月 31 日-9 月 1 日、ウェルシティ島根、島根）

加治屋勝子、岸博子、川道穂津美、小林誠：血管平滑筋のスフィンゴシルホスホリルコリン（SPC）誘導異常収縮における膜ラフトの役割、第 59 回日本生理学会中国四国地方会（平成 19 年 11 月 10 日、徳島大学、徳島）

郭鳳玲、川道穂津美、岸博子、加治屋勝子、小林誠：血管平滑筋のカルシウム非依存性収縮における Fyn チロシンキナーゼの重要性、第 59 回日本生理学会中国四国地方会（平成 19 年 11 月 10 日、徳島大学、徳島）

岸博子、加治屋勝子、川道穂津美、高田雄一、徳森大輔、徐丹、郭鳳玲、王晨、松尾さやか、小林誠：血管平滑筋異常収縮のシグナル伝達経路における膜ラフトの関与とこれに対するエイコサペンタエン酸の抑制メカニズム、第 15 回日本血管生物医学学会（平成 19 年 11 月 29-30 日、九州大学医学部百年講堂、福岡）

川道穂津美、王晨、岸博子、中村彰男、吉山伸司、小濱一弘、小林誠：血管平滑筋のカルシウム非依存性収縮におけるアクチン運動の解析、第 45 回日本生物物理学会（平成 19 年 12 月 21-23 日、パシフィコ横浜、横浜）

小林誠、川道穂津美、岸博子、加治屋勝子：血管平滑筋の Ca^{2+} 感受性増強における Fyn チロシンキナーゼの重要性、日本生理学会サテライト企画 名取禮二記念筋肉シンポジウム（平成 20 年 3 月 24 日、東京医科大学病院臨床講堂、東京）

C. Wang, H. Kishi, H. Kawamichi, K. Kajiya, Y. Takada, D. Tokumori, S. Kobayashi: The screening for selective inhibitors of Rho-kinase-mediated Ca^{2+} -sensitization of vascular smooth muscle (VSM) contraction. 日本生理学会サテライト企画 名取禮二記念筋肉シンポジウム（平成 20 年 3 月 24 日、東京医科大学病院臨床講堂、東京）

C. Wang, H. Kishi, H. Kawamichi, K. Kajiya, Y. Maeda, M. Nakashima, S. Kobayashi, Proteomic analysis of lipid raft protein composition in human arterial smooth muscle. 日本生理学会サテライト企画 名取禮二記念筋肉シンポジウム（平成 20 年 3 月 24 日、東京医科大学病院臨床講堂、東京）

S. Kobayashi, H. Kishi, H. Kawamichi, K. Kajiya, Y. Takada, D. Tokumori, F. Guo, D. Xu, C. Wang, S. Matsuo, Molecular mechanisms of Ca^{2+} -sensitization of smooth muscle contraction. 第 85 回日本生理学会（平成 20 年 3 月 25-27 日、京王プラザホテル東京、東京）

H. Kishi, N. Morikage, K. Kajiya, H. Kawamichi, Y. Takada, D. Tokumori, D. Xu, F. Guo, C. Wang, S. Matsuo, S. Kobayashi, The importance of cholesterol and membrane rafts in abnormal vascular smooth muscle contraction. 第 85 回日本生理学会（平成 20 年 3 月 25-27 日、京王プラザホテル東京、東京）

D. Xu, H. Kishi, H. Kawamichi, K. Kajiya, Y. Takada, S. Kobayashi: Fyn tyrosine kinase is a novel signaling molecule in actin stress fiber formation in fibroblasts.、第 85 回日本生理学会（平成 20 年 3 月 25-27 日、京王プラザホテル東京、東京）

H. Kawamichi, C. Wang, H. Kishi, A. Nakamura, S. Yoshiyama, K. Kohama, S. Kobayashi: Ca^{2+} -independent and direct phosphorylation of myosin by Rho-kinase can solely stimulate actomyosin sliding at the maximum velocity. 第 85 回日本生理学会（平成 20 年 3 月 25-27 日、京王プラザホテル東京、東京）。

Kajiya, H. Kishi, H. Kawamichi, Y. Takada, S. Kobayashi : High affinity of sphingosylphosphorylcholine (SPC) for membrane rafts leading to abnormal vascular contraction., 第 85 回日本生理学会 (平成 20 年 3 月 25-27 日、京王プラザホテル東京、東京)

4) その他の研究発表など

なし

5) 特許申請

なし

6) 受賞

なし

7) 外部資金獲得状況

1 件、科研費

8) その他の研究費獲得

1 件

岩尾康宏 教授 (医学系) グループ関係

1) 原著論文

Srinak, N., Hisada, K., Kamata, Y. and Charusiri, P., 2007, Stratigraphy of the Mae Sariang Group of Northwestern Thailand: Implication for Paleoenvironments and Tectonic Setting. The National History Journal of Chulalongkorn University, 7, 87-108.

山本由弦・栗原敏之・常磐哲也・植田勇人・中江 訓・脇田浩二・原 英俊・内野隆之・上野 光・鎌田祥仁・山田泰広・宮川歩夢・辻 健, 2007, 千倉層群畑層中に見られる大規模コンボリューション葉理と火炎構造, 113, 口絵.

Kamata, Y., Ueno, K., Hara, H., Ichise M., Charoentitirat, T., Charusiri, P., Sardud, A. and Hisada, K., (in press), Classification of the Sibumasu-Paleotethys tectonic division in Thailand using chert lithofacies, Island Arc.

Hisada, K., Ito, H. and Kamata, Y. (2008) Geological Prospect for Source Rocks of Prehistoric Raw Materials in the Bolaghi and Arsanjan Areas. In, Tsuneki, A. and Zeidi, M., eds., Tang-E Bolaghi, The Iran-Japanese Archaeological Project for the Sivand Dam Salvage area, Iranian Center for Archaeological Research and Department of Archaeology, University of Tsukuba.

満村 健一・鎌田祥仁 (印刷中), 丹波帯篠山セクションにおける Guadalupian-Lopingian (G-L) 境界の放射虫群集変化, 大阪微化石研究会誌, 特別号, 14 号, 第 9 回放散虫研究会論文集.

Harada Y., Matsumoto T., Hirahara S., Nakashima A., Ueno S., Oda S., Miyazaki S., Iwao Y., Characterization of a sperm factor for egg activation at fertilization of the newt *Cynops pyrrhogaster*. *Developmental Biology*, 306, 797-808, 2007

Ueda Y., Imaizumi C., Kubo H., Sato K., Fukami Y., Iwao Y., Analysis of terminal sugar moieties and species-specificities of acrosome reaction-inducing substance in *Xenopus* (ARISX). *Development, Growth & Differentiation*, 49, 591-601, 2007

著書等

時間学概論, 時間とそのリズムを記録する地球, 分担執筆, 恒星社厚生閣, 2008

日本地方地質誌 3 「関東地方」, 足尾山地の中・古生界, 分担執筆, 朝倉書店, 印刷中

片桐千明, 岩尾康宏 その他 86 名, レーヴン/ジョンソン 生物学 (翻訳), 34 章, 86-701, 培風館, 東京, 2007 年

2) 国際学会発表

Kamata, Y., Geochemical study of two types chert from the Paleotethys in Thailand (Preliminary report), Proceedings of the third International Symposium on Geological Anatomy of East and South Asia: Paleogeography and Paleoenvironment in Eastern Tethys (IGCP516), 2007, October, Dehli, India. 71-73.

Harada Y., Iwao Y., Characterization of a sperm factor that induces Ca increase for egg activation at newt fertilization, Gordon Research Conference (Poster presentation), Primoth (USA), 2007 年 7 月

3) 国内学会発表

鎌田祥仁, ジュラ紀付加体における地震性断層岩の発見, 日本地質学会第 114 年学術大会, 北海道大学. 2007 年 9 月.

山崎 園田, 九田, 藤田, 浦口, 田尻, 小嶋, 西郷, 村上, T-box 遺伝子 byn と Notch シグナルの組合せによるショウジョウバエ後腸の細胞型決定機構, 第 30 回日本分子生物学会年会講演要旨集, , 512-512, 2007 年 12 月

山縣広, 奥村高志, 古屋信彦, 天内和人, 村上柳太郎, ショウジョウバエ内胚葉特異的 GATAe による標的遺伝子の活性化機構, 第 30 回日本分子生物学会年会講演要旨集, , 670-670, 2007 年 12 月

R. Maeda, S. Hozumi, K. Taniguchi, T. Sasamura, R. Murakami, K. Matsuno, Roles of single-minded in the left-right asymmetric development of the embryonic gut in *Drosophila*, 第 30 回日本分子生物学会年会講演要旨集, , 673-673, 2007 年 12 月

園田, 山崎, 植草, 藤田, 九田, 山本, 村上, Wg シグナルによるショウジョウバエ後腸のパターン形成, 第 30 回日本分子生物学会年会講演要旨集, , 676-676, 2007 年 12 月

永井慶太, 原田裕一郎, 上田泰史, 久保英夫, 上野秀一, 岩尾康宏, アフリカツメガエル受精に必要な精子細胞膜上の糖タンパク質の性質, 第 78 回日本動物学会 (弘前), 2007 年 9 月

原田裕一郎, 松本珠実, 上野秀一, 岩尾康宏, イモリ卵付活分子の機能解析と細胞内分布, 第 78 回日本動物学会 (弘前), 2007 年 9 月

川添真理, 原田裕一郎, 上野秀一, 岩尾康宏, 両生類の受精卵における Ca²⁺ 波の伝播に関わる細胞内小器官, 第 78 回日本動物学会 (弘前), 2007 年 9 月

吉川智康, 上野秀一, 岩尾康宏, ツメガエルの受精と細胞周期再開に関わるマトリックスメタロプロテアーゼの性質, 第 78 回日本動物学会 (弘前), 2007 年 9 月

瀧水智代, 上野秀一, 岩尾康宏, PI3K/TOR シグナル経路はツメガエル初期胚における細胞周期伸長に関与する, 第 30 回日本分子生物学会年会 (横浜), 2007 年 12 月

上野秀一, 岩尾康宏, PTEN 核移行はツメガエル胚における MBT 以降の細胞周期伸長に関与している, 第 30 回日本分子生物学会年会 (横浜), 2007 年 12 月

4) その他の研究発表など

講演等

日本科学未来館, ランドセル・ミーティング関連イベント サイエンスカフェ 「時間旅行に出かけよう!」で講演.
2007年4月22日.

山口大学イブニングセミナー2007『宇宙・惑星的時間と認知的時間の多様性』, 鎌田祥仁(演題: 日本列島の現在・過去・未来), キャンパス・イノベーションセンター(東京都港区芝浦), 平成19年11月30日(金).

岩尾康宏. 「両生類の受精と初期発生--ライブセルイメージングを用いた解析」, 山口大学大学院医学系研究科応用分子生命科学専攻 第3回産学公連携セミナー「生命化学への新しいアプローチ: 胚操作とバイオイメージング」, 山口, 2007年11月

5) 特許申請

なし

6) 受賞

なし

7) 外部資金獲得状況

科学研究費補助金

特定領域研究(公募) 1件、基盤(B) 1件

(8) その他の研究費獲得

なし

5. 自己評価

4. 活動報告・成果発表状況の1)、2)及び3)の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 IV: 年度計画を上回って実施している, III: 年度計画を順調に実施している, II: 年度計画を十分に実施できていない, I: 年度計画を実施していない】(該当するいずれか一つに○を付けてください。)その際、その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。

1) 年度計画を順調に実施している

それぞれのグループで年次計画と関連した研究が進展している。本年度は、研究所として時間学セミナーを継続的にを行い交流を図った。一方で、部門の中のグループ間で討論する場を設けることはできなかった。

2) 年度計画を順調に実施している

3) 年度計画を順調に実施している

6. 18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要

平成18年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要(5. 自己評価を踏まえて記載してください。)

18年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。

研究計画・方法（平成19年度以降）

各プロジェクト毎の研究計画と方法は、継続して研究を継続していく予定である。研究計画や方法は、昨年の研究の継続的研究と新たな知見による研究、そして研究方法を行うことになろう。

19年度は、部門内の時間に関する研究プロジェクトが始動し、この研究に向かって競争的な原理を駆使して、時間学研究の新たな知見を見出したい。

部 門 用（社会的時間研究部門）

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元の見点から記入してください。

石田経済学部教授グループ関係

辻正二他、山口市南部地域まちづくりアンケート調査報告書、社団法人吉南青年会議所、山口市、2007年 1-52

辻正二、都市部生涯現役世代の行動パターンと生涯現役社会づくりのリーダ養成、『地域特性をふまえた生涯現役プログラムに関する評価研究』（厚生労働科学研究費補助金）178-208頁 2007年

辻正二「退職準備者たちの退職後の時間意識と健康：退職準備者たちの75歳危機について」『時間学研究』（山口大学時間学研究所）第1巻、43-61

『老後所得保障の経済分析』東洋経済新報社、2007年10月、274頁

「個人年金保険の需要動向について」『週刊 社会保障』第2499号、2007年9月、53-58頁

「保険契約法現代化の持つ経済学的意味」『保険学雑誌』第599号、2007年12月、81-96頁

Masahito TAKAHASHI、Mobile Phones as Accelerators of Sexual Behavior, Abstract Book of the 18th Congress of the World Association for Sexual Health, p.38

高橋征仁、「携帯・パソコンの普及で若者の性行動はどう変わったか？」日本性教育協会編『性教育実践のための指導者講習会テキスト』1-7頁。

高橋征仁、「＜悪＞のグレースケール—道徳的社会化への類縁化アプローチ序説」『犯罪社会学研究』第32号 60-75頁。

高橋征仁、「性現象の多面性と多様性—第6回青少年の性行動全国調査にみられるもう一つの側面」『現代性教育研究月報』25巻10号、1-7頁。

学会報告

辻 正二「大学生の社会的速度意識の分析」、第114回社会分析学会例会、2007年12月

石田成則「保険契約法現代化の持つ経済学的意味」2007年度日本保険学会全国大会 2007年10月、桃山学院大学

鍋山祥子第21回日本地域福祉学会大会での研究報告「仕事を持つ別居子による遠距離介護」

その他

鍋山祥子「ワーク・ライフ・バランスをテーマとする講演」 2007年度13回

鍋山祥子『Withus ニュース』12月号、トクヤマ労働組合、pp.2-8、2007.12

鍋山祥子『山口の労働』山口県労働協会、pp.2-8、2008.1

鍋山祥子『ピュアネット』39号、(財)やまぐち女性財団、pp.2-8、2008.3

外部資金獲得

辻正二、文部科学省科学研究費補助金 萌芽研究 代表「現代社会におけるスピード化と人間のリズムのズレに関する時間学的総合研究」（2000千円）

高橋征仁、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C） 代表「道徳意識の類縁化作用に関する比較文化的研究」（800千円）

高橋征仁、山口大学主体研究員経費 「＜悪＞のグレースケール形成に関する社会心理学的研究」（300千円）

鍋山祥子、受託研究：山口ケーブルビジョン株式会社「遠距離介護システム構築のための基礎調査および事業化への提言」

鍋山祥子、研究代表者、文部科学省科学研究費補助金 若手(B)「遠距離介護を可能にする地域ケアシステムについての

研究
5. 自己評価 4. 活動報告・成果発表状況の1)、2)及び3)の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 IV：年度計画を上回って実施している, III：年度計画を順調に実施している, II：年度計画を十分に実施できていない, I：年度計画を実施していない】(該当するいずれか一つに○を付けてください。)]その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。
4 グループの総合評価 1) 年度計画を順調に実施している 各研究分担者は、研究論文や口頭発表の形で研究成果を着実に発表できている。 2) 年度計画を順調に実施している 新しい学際領域の創出にはまだ至っていないが、時間に関する形而上学的・認識論的探求から、新たな視点の提供が試みられている。 3) 年度計画を順調に実施している 一般向けの書物や発表もあり、社会への成果の還元もなされている。
6. 20年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要 平成20年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要(5.自己評価を踏まえて記載してください。) 20年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。
研究計画・方法(平成20年度) 「時間学基礎論セミナー」を継続する ・これまでの研究成果に基づき、講演会や出前講義等による社会還元を目指す。
----- 研究計画・方法(平成20年度以降) 「時間学基礎論セミナー」を継続する ・これまでの研究成果に基づき、講演会や出前講義等による社会還元を目指す。

部 門 用 (応用的時間研究部門)

4. 研究活動・成果発表状況

- 1) 研究部門別に研究業績、外部資金獲得状況等に基づいて記入してください。
- 2) 総合的な時間学研究及び新しい学際領域創出の観点から記入してください。
- 3) 成果の社会還元観点から記入してください。

1) 中村彰治医学部教授グループ関係

1)

研究業績

【発表論文】

1. J. Ishikawa, C. Sutoh, A. Ishikawa, H. Kagechika, H. Hirano and S. Nakamura: 13-cis Retinoic acid alters the cellular morphology of slice-cultured serotonergic neurons in the rat. *Eur. J Neurosci.*, 27: 2363-2372, 2008.
2. Harada N, Mahbub MH: Diagnosis of vascular injuries caused by hand-transmitted vibration. *Int Arch Occup Environ Health*, 81: 507-518, 2008.
3. Inagaki J, Mahbub MH, Harada N: Effects of timing of warm bathing on night sleep in young healthy subjects. *Bulletin Yamaguchi Medical School*, 54:9-17, 2007.
4. Yamamoto S, Iwamoto M, Inoue M, Harada N: Evaluation of the effect of heat exposure on the autonomic nervous system by heart rate variability and urinary catecholamines. *J Occup. Health*, 49(3): 199-204, 2007.
5. Mahbub MH, Yokoyama K, Laskar MS, Inoue M, Takahashi Y, Yamamoto S, Harada N: Assessing the influence of antivibration glove on digital vascular responses to acute hand-arm vibration, *J Occup. Health*, 49(3): 165-171, 2007.
6. Takahashi Y, Harada N: A consideration of an evaluation index for high-level low-frequency noise by taking into account the effect of human body vibration. *J Low Frequency Noise Vibration Active Control*, 26(1): 15-27, 2007.
7. 山本真二, 岩本美江子, 井上正岩, 原田規章. 暑熱曝露の生体影響評価に関する検討: (その1) 一心拍変動、尿中カテコールアミンを用いて、*労働科学*, 83(1): 1-6, 2007.
8. 涌井忠昭, 原田規章. 介護福祉士養成校学生の腰痛の実態—介護職員および介護実習経験のない学生との比較—, *人間生活科学研究*, 43(1): 33-37, 2007.
9. Manabu Sugii, Ryo Okada, Hiroshi Matsuno, Satoru Miyano: Performance improvement in protein N-myristoyl classification by BONSAI with insignificant indexing symbol, *Genome Informatics*, Vol.18, No.1, pp.277-286, 2007.
10. Sujino, M., Nagano, M., Fujioka, A., Shigeyoshi, Y. and Inouye, S.-I.T.: Temporal profile of circadian clock gene expression in a transplanted suprachiasmatic nucleus and peripheral tissues. *Eur. J Neurosci.*, 26: 2731-2738, 2007.

【解説】

1. 井上慎一, 升本宏平, 中枢時計としての視交叉上核—残された問題, *臨床ニューロサイエンス*, 中外医学社, 25, No10, 1124-1127, 2007
2. 井上慎一, 社会の速度と現代の危機: ヒトの時間は進みが遅い, *時間学研究*, 山口大学時間学研究所, 1, 5-14, 2007

【学会発表】

1. 木田裕之, 中村彰治: IL-1 β 脳室内慢性投与によるモノアミン線維密度の変化とラットの行動解析 The effects of IL-1 β on behavioral responses and the density of monoamine axons, 第30回日本神経科学大会 2007年9月
2. Junko Ishikawa, Chihiro Sutoh, Akinori Ishikawa, Hiroyuki Kagechika, Hitoshi Hirano, Shoji Nakamura: 13-cis Retinoic acid alters the cellular morphology of slice-cultured serotonergic neurons in the rat, *Society For Neuroscience 37th Annual Meeting*, November 2007
3. Mahbub MH, Takahashi Y, Ohnari H, Akebi T, Tanigawa K, Yang G, Ohmura K, Harada N: Digital blood flow change in healthy subjects after exposure to acute hand-arm vibration, *Proceedings of the 42nd UK Conference on Human Responses to Vibration*, Southampton, UK, September, 2007, pp177-183
4. Harada N, Toibana N, Ishitake T, Kurozawa Y, Mahbub MH, Ohmura K, Wang B: A preliminary study on diagnostic significance of ISO standardized test methods for hand-arm vibration syndrome, *Proceedings of the 42nd UK Conference on Human Responses to Vibration*, Southampton, UK, September, 2007, pp163-167
5. Mahbub MH, Inoue M, Yokoyama K, Akebi T, Tanigawa K, Mijota J, Harada N: Differences in digital vascular responses between glabrous and nonglabrous skin induced by acute exposure to hand-transmitted vibration, In: Bovenzi M, Peretti A, Nataletti P, Moschioni G (editors) *Proceedings of the 11th International Conference on Hand-Arm Vibration*, Bologna, Italy, pp193-200, June, 2007
6. Mahbub MH, 大村佳代, 井上正岩, 原田規章: 手腕振動障害における末梢循環異常の定量化, *日本産業衛生学会、大阪、産業衛生学雑誌*, 49(増刊): 397, 2007年5月
7. 明日徹, 田中美沙, 溝田順子, 谷川和子, 大村佳代, 涌井忠昭, 井上正岩, 原田規章: 移乗介助動作における教育介入が関節角度・筋活動に与える影響, *日本衛生学会、熊本、日本衛生学雑誌*, 63(2): 382, 2008年3月
8. 池上雄人, 松野浩嗣, 井上慎一: マウス時計遺伝子機構の光同調シミュレーション, 第14回日本時間生物学学会学術大会, 1-C-004, 2007

9. 松井明生、松野浩嗣、井上慎一：システム生物学的アプローチによるマウス概日リズムの遺伝子発現位相パターンの理解、第14回日本時間生物学会学術大会、1-C-007, 2007
10. 三藤なつ美、松野浩嗣、井上慎一、シミュレーションによるマウス時計遺伝子フィードバックループの相補的働きの検証、第14回日本時間生物学会学術大会、1-C-034, 2007

科研費などの外部資金の獲得状況

1. 原田規章：

- 1) 平成19年度厚労省委託研究（代表）
振動障害診断のための冷水浸漬皮膚温検査法（12°C5分）に関する調査研究，1059万円
- 2) 平成19年度文科省科学研究費基盤研究B（代表）
手腕振動曝露による生体影響評価の確立と曝露基準・作業基準の体系化，490万円
- 3) 平成19年度文科省科学研究費基盤研究C（分担）
高齢農業従事者の疲労を規定する生活環境と食生活改善に向けた行動支援，160万円
- 4) 平成19年度文科省科学研究費基盤研究C（分担）
入浴のタイミングが睡眠に及ぼす影響の評価，250万円
- 5) 平成19年度文科省科学研究費萌芽研究（代表）
マイクロバブル温浴の末梢循環改善効果とその条件，340万円
- 6) 平成19年度文科省科学研究費萌芽研究（分担）
現代社会におけるスピード化と人間のリズムのズレに関する時間学的総合研究，200万円

2. 松野浩嗣：

- 1) 特定領域研究（分担）
「イン・シリコ生命ネットワーク構築のための遺伝子ネットワーク推定とシミュレーション」（宮野悟代表），350万円
- 2) 平成19年度文科省科学研究費基盤研究B（代表）
システム生物学的アプローチによる概日リズムの光同調機構の解明，260万円

2)

3)

社会貢献、その他

井上慎一：

【新聞報道】

辻淵智之、いじめと生きる、とりあえず「明日」、中日新聞、2007.3.24 朝刊、38面

神田さやか；明解要解 25日は15夜-改めて「月」の話 謎めく人体と満ち欠けの関係；産経新聞；東京；'9.11 13面

米山肅彦、子供と大人の時間の感じ方、読売新聞東京本社版、2008年1月26日、夕刊8-9面

【雑誌記事】

吉原徹；大人になってからのほうが1年を短く感じるワケ；L25 リクルートクロスメディア；東京；'No.31 2007.8.30 p13

雑誌記者無記名、人生の時間は自分の手中にある；雑誌報道；第三文明；2007年5月号 18-20；

飯田守、夜型の夫に不満な朝型の妻、プレジデントファミリー 2巻、2007、11月号、97ページ

飯田守、夫婦の心理戦 娘の深夜勉強を妻は喜んでいるけれど、プレジデントファミリー. 第2巻2007、12月号 73ページ

【テレビ報道】

2007.10.29 辻正二 井上慎一；山口朝日放送夕方のニュース；時間学研究所；山口

2) 松富直利農学部教授グループ関係

1)

研究業績

【発表論文】

1. Ito, K., Ishimaru, T., Kimura F., Matsudomi, N. : Importance of N-glycosylation positioning for secretion and folding of ovalbumin. Biochemical and Biophysical Research Communications, 361: 725-731 (Jul. 2007)

【その他】

1. 松富直利：卵黄ホスビチンによる液卵白の耐熱化とその高機能化に関する研究. 財団法人すかいらくフードサイエンス研究所 食に関する助成研究調査報告書, 20: 47-52 (2007年10月)

【招待講演】

国際学会等

1. Matsudomi, N. Importance of N-glycosylation positioning for secretion and folding of ovalbumin. 2007 Marine Bio Regional Innovation Center Seminar. Gangneung, Korea (Aug., 2007)

国内学会等

1. 松富直利：食品蛋白質の凝集とその利用. 大阪大学蛋白質研究所セミナー「蛋白質の会合と凝集-機能、病気、利用」（大阪）（2007年6月）
2. 松富直利：卵黄ホスビチンによる液卵白の耐熱化とその高機能化に関する研究. 財団法人すかいらくフードサイエンス研究所 第19回学術助成金による研究成果発表会（東京）（2007年11月）

【学会発表】

1. 石丸、伊藤、松富：鶏卵白アルブミンのS化（熱安定化）機構の解明、日本農芸化学会中四国支部第18回講演

- 会 (5/12, 県立広島大)
2. 岡本、属、吉賀、松富：ホスビチンによる液卵白の耐熱化とその高機能化、日本食品科学工学会平成 19 年度大会 (9/6-8, 福岡・中村学園大)
 3. 石丸、伊藤、松富：鶏卵白アルブミンの熱安定化 (S 化) 機構の解明、日本農芸化学会中四国・西日本支部合同大会 (9/15, 山口大)
 4. 田中、中、石丸、松富：鶏卵白アルブミンの構造安定化と加熱凝集に及ぼす SH 基の影響、日本農芸化学会中四国・西日本支部合同大会 (9/15, 山口大)
 5. 伊藤、石丸、岸本、松富：鶏卵白アルブミンの folding における糖鎖付加の役割、日本農芸化学会中四国・西日本支部合同大会 (9/15, 山口大)
 6. 石丸、伊藤、松富：アルカリ処理によるオボアルブミンの熱安定化：Ser 残基のラセミ化の関与について、日本農芸化学会中四国支部例会 (1/26, 徳島大)
 7. 田中、石丸、中、松富：鶏卵白アルブミン (OVA) の構造特性における SH 基の役割、日本農芸化学会中四国支部例会 (1/26, 徳島大)

研究助成金

奨学寄附金：1 件 (1000 千円), 受託研究：1 件 (1000 千円)

2)

3)

社会貢献、その他

その他の教育研究活動

山口県食品開発推進協議会 (会長) (2007 年 3 月～)

山口大学農学部—山口県連携食品加工部会長 (2007 年 4 月～)

5. 自己評価

4. 活動報告・成果発表状況の 1)、2) 及び 3) の観点別に自己評価を記載してください。【自己評価 **Ⅳ**：年度計画を上回って実施している, **Ⅲ**：年度計画を順調に実施している, **Ⅱ**：年度計画を十分に実施できていない, **I**：年度計画を実施していない】(該当するいずれか一つに○を付けてください。) その際、自己評価の理由及び当該年度の問題点、改善点を併せて記載するようにしてください。

4 グループの総合評価

1) 年度計画を順調に実施している

各部門としては概ね順調であるが、部門全体としての活動がほとんどなされなかった点は反省している。

2) 年度計画を順調に実施している

総合的な時間学研究及び新しい学際領域を創出する具体的な実績はでていないが、その基礎となる成果は着実に上がっていると評価される。

3) 年度計画を順調に実施している

昨年度に比較すると今年度の実績はやや劣るが、部門全体として十分な実績を上げたと評価される。

6. 20 年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要

平成 20 年度及びそれ以降の研究計画・方法の概要 (5. 自己評価を踏まえて記載してください。)

20 年度の計画とそれ以降の計画に分けて記入してください。

8. 総合評価

各部門の評価を踏まえて、スペース、運営委員会の活動等の観点から時間学研究所の総合的な評価を記載してください。

19年度の研究は、4研究部門（「理論的時間研究部門」、「自然的時間研究部門」、「社会的時間研究部門」、「応用的時間研究部門」）に継続申請12件、新規申請3件の計15件の時間学研究プロジェクトを受理、審査の上承認した。

時間学研究が目指す時間の研究は、(1)時間の研究を通して学内外に新たな学際的研究を構築し、新たな時間学の可能性を示唆すること、(2)時間学研究所の研究の成果を社会に還元することにある。

(1)の研究：

19年度は、研究推進のために雑誌発行、セミナー開催などを企画、実施したので「時間学（文理融合的な）」研究の実績は進展した。各部門の研究実績は、4部門に記載されている通りである。どの部門とも研究業績、外部資金の導入等に関して年度計画以上の成果を出しているところが増加した。4部門とも研究の成果が着実に生まれつつあり、特に、「応用的時間研究部門」の中村彰治医学部グループと「自然的時間研究部門」の藤島政博（理工）グループの研究活動が活発であった。他に入不二基義氏による『時間と絶対と相対と—運命論から何を読み取るべきか』（勁草書房）や『哲学の誤読—入試現代文で哲学する！』（筑摩書房・ちくま新書）が刊行され、時間学の研究成果が結実した。その他、研究所として研究活動の推進の一貫として「時間学セミナー」を行った。このセミナーは文理融合を目指す研究所の性格として研究者間の知的連携を計る目的をもつ。年間で4回、14名の発表者による研究成果が披露された。その他、専門研究の推進のための「特別セミナー」も2回実施した。

(2)の活動：

4月に科学未来館との間で企画展「時間旅行展—Time! Time! Time!」に参加して、時間研究の面白さ、時間の不思議さを、対話を通して伝え、6月に『時の文化を創る』と題した時間学研究所の主催の学術講演会では、「現在の社会的時間の現状」や「日本人のせっかちさ」や「マヤ・インカの時間」の論議から時間の多様性と時間を創る視点をの意義を伝え、同時に参加者との対話をすることができた。山口市の「街なか大学」における連続講座「時間学」（後期開講）では、「高齢社会を如何に過ごせばよいか」というタイトルで、5回の講義をおこなった。それ以外にも個々の研究者によって多数の講演がされ、社会貢献活動としては、十分な成果は挙げていると考える。

以上、(1)、(2)の実績からすると、19年度実績を総合的に評価すれば、「優秀な水準にある」ということが出来ると思われる。

しかし、今後、研究拠点になるためには、国際的研究拠点体制の整備が欠かせない。その準備として時間学研究の研究者養成のために若手の研究者の支援が必要であろう。19年度には研究成果を社会貢献として講演やセミナーをするだけでなく、共通教育など教育面で時間学の成果を伝える作業も必要であろう。それから山口大学時間学研究所が「時間学」の研究拠点になるためには、何よりもパラダイムとして確立させることが急務である。次年度には、時間学のテキストを刊行することも課題となろう。

研究計画・方法（平成20年度）

平成20年度より、時間学研究所では、これまでの部門を廃止し、研究グループによる新しい研究体制がスタートするので、この項は省略する。

研究計画・方法（平成20年度以降）

